

データ処理におけるドキュメント (文書) Document

—そしてドキュメンテーション (文書調べ) について—
Documentation

第3研修部 金 沢 義 夫

「答」は実に体裁よく書くが、ときおり行う筆算はコ
チョ・コチョと乱筆で紙のわきでもとめ、提出するとき
になると筆算のところはあえなく消されてしまう。

ノートのときも同じで「答」を得れば、まるで「答」
には無縁なもののように筆算はゴミと化してしまう。乱
筆ながら筆算を軽くあつかって困ることがある。

たまたま設計しているとき、もう一度たしかめたい筆
算があっても、どこにちらかしておいたのかわからなく
なって、もう一度筆算の労をおわされたりする場合がよ
くある。

先輩はよく言っていた。

「設計の流れをきれいに記述する心得で世話になった
筆算もていねいに書くべきである。出来得ればノートの
左頁を記述にあて、右頁を筆算にささげるぐらいの記録
尊重の心得がほしい……」と

ドキュメントは作業の過程を述べたものとか、各段階
の完成時の記録とでもいえよう。

このドキュメントの目的は

- 1 担当者にしかわからないといった障害を最少限
にくいとめるために必要なこと。
- 2 内容の検討が開発と併行するならば、その時点
でドキュメントを通じて行うことにより、担当者
の経験・技能の差が調整され、一定のレベルに、
すべての態勢を保っておくことができる。

(すぐれた要員をかかえていても、満足できる
人員であるといえない場合が発生する。)

- 3 完全なドキュメントがあれば、変更とか、つぎ
の作業の参照資料として容易にその機能を発揮す
るのは当然である。

(ドキュメントがないために、変更のむずかし
さ、作りなおしの面倒とかはしばしば経験す
るところである。)

- 4 また、ひとつの目的として、いままでに作成さ
れたテクニックを、他に対する教材として利用で
きる。

(着想は消滅して、永久の教材として現れない
こともある。)

教育用テキストは、こうした生きたものを取り
入れることによって、より効果的なものとなる。

このドキュメントは業務分野に応じてさまざまな様式

があろう。しかし、記録として残ることにより必要に即
答してくれる共用的資料としての役割にかわりはない。

そしてこの文書を作成することは、製造業のような量
産とは比較にならない。むしろ一品料理にあてはまるも
のである。

もしも設計に変更があれば、製造過程の関連部門に対
する再手配は大変なものだが、設計部門には電話で簡単
に連絡できるというソフトな一面がある。

しかしながら設計部門では「設計とはなにか」という
やっかいな問題をかかえている。

機能をいかに正確に、しかも能率よく生かすかという
ことと、それをいかに明確に記述し保存するかというこ
とである。

たとえばプログラム・ドキュメントの仕様を

1. プログラミングの概要
2. プログラムの流れ図
3. モジュールの機能
4. 使用言語
5. 入出力設計
6. データ・リスト
7. 補足 (参考文献)

のように様式化しておくことは、情報処理への重要な過
程である。

コンピュータは単なる計算機ではなく、情報を処理す
るものとして利用されている。散逸している資料の集合
態から、意味のある必要な配りのものだけを集め、そこ
に新しい組立てを得ようとしている。

開発のための資料が日々増加している今日にあっては、
これほど便利な助手はいない。

ドキュメンテーション (情報探索) にはドキュメント
の正確、明瞭、または標準化、コード化などがどうしても
必要なのである。

すなわち、日常の正確・簡明なドキュメントは、ドク
ュメンテーションによって生彩をはなつてあろう。

「明日は雪だ」という情報によって外出をやめる者もあ
れば、スキーに出かける者もある。

この概念のコード化などと……ドキュメントの問題は
外にも多々あるが、情報処理にひとつの仕様を工夫して
みることは、つぎの開発を助長することになろう。